

ボランティアグループがつくる和歌山県男女共同参画センターの書評誌

この本よんだ？

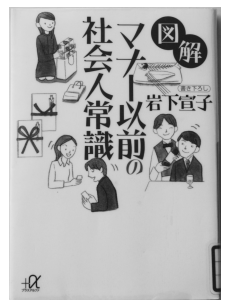
～りいぶる BOOK プラス～



図解マナー以前の社会人常識

岩下宣子 著 講談社+α文庫 2005年 (O・I)

この本は書名が「マナー以前の社会人の常識」となっていますが、やはりマナーの本です。しかし、形を重視するマナー本もある中で、どうしてそのようにするのかという説明が随所に書かれていますので、心を重視するマナー本と言えるでしょう。また、要所にイラストが描かれていて、文庫本なのですが、各項目の解説の長さが大体半ページ程度のものが多いです。別に初めから読み進めなくてもよく、自分の興味のあるところを拾い読みすることができます。それに、この本は、辞書的なマナー本と違って、文章も平易で読み物としても楽しく読み進められるものですので、家事の合間、仕事の休憩時間など空いた時間にちょっとずつ読むことができます。



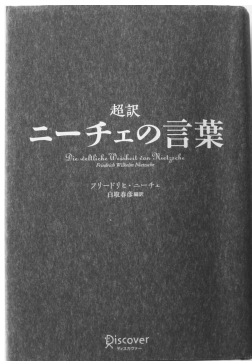
さて、この本の具体的な内容ですが、1章が「おいしい料理で楽しい食事」で、中見出しが「食事の際の基本」「日本料理店にて」「レストランにて」「中華料理店にて」「バイキング・立食パーティにて」。2章が「日々の暮らしをなめらかにする、お見舞い・贈答・弔事」で、中見出しが「お見舞い」「贈答」「弔事」。3章が「恥をかかない日常のふるまい」で、中見出しが「ビジネス訪問」「個人宅の訪問」。4章が「好感がもたれる言葉づかい」で、中見出しが「食事のとき」「病気のお見舞いに行き」「通夜・葬式にて」「暮らしの中で」「ビジネスにて」。5章が「いつも気になる、おつきあいのお金」で、中見出しが「慶事」「弔事」「贈答」という構成です。

日常生活を豊かにするためにも、この書評を読んだ多くの方が、りいぶるの図書室に行って、ぜひこの本を手にとって、よければ借りてじっくり読んでほしいです。しかし、きっと何人かの方は、この本を書店で買って、バッグの中、リビングのテーブルや棚などに置いて、好きなときに読むことになるでしょう。そのくらい役に立つ本です。とにかくだまされたと思って、一度本書を手にとってみてください。とってもおすすめです。

(エビ)

超訳 ニーチェの言葉

フリードリヒ・ヴィルヘルム・ニーチェ 白取春彦編訳 株式会社ディスカヴァー・トゥエンティワン 2010年 (K・ニ)



2010年に発売され、哲学書では異例の大ベストセラーになった本書を目や耳にした人も多いはず。スポーツ選手や芸能人のファンも多い。

フリードリヒ・ヴィルヘルム・ニーチェ(1844~1900)はドイツの哲学者である。

代表作に『ツァラトゥストラはかく語りき』『善悪の彼岸』『人間的な、あまりにも人間的な』などがある。

超訳された232ものニーチェの言葉が、1ページの中に収められているので、どこから読んでもいい。「己について」「喜について」「生について」「心について」「友について」「世について」「人について」「愛について」「知について」「美について」の10項目に分類されているので、気になるところから読みすすめてもいい。自由なのである。

「はじめに」の末尾に「ニーチェの哲学は決して難しくない。少しよんでみれば、興奮を覚えるだろう。ニーチェの文章が読者を興奮させるのではなく、自分の頭で考えるという生々しさに読者が刺激とインスパイアを受けるからだ。そこにニーチェの最大の魅力がある。」

その言葉のとおり、納得する言葉が本書の中にあるかもしれない。

確かめるためにも、ぜひ、読んでみてください。

(K)

耳の聞こえない私が4カ国語しゃべれる理由

金修琳 著 ポプラ社 2011年 (J・キ)

著者は6歳の時に聴覚を失い、人の口の形を見て何をいっているか理解しています。それだけでも大変なのに、実は韓国語、日本語、英語、スペイン語という4カ国語を理解し、話すことができます。そして、今はその語学を活かし外資系企業に勤めながら、子育てをする母でもあるのですが、そこにいたるまでには、壮絶な運命をたどっているのです。本書は、その今までの生き様について、語っています。

彼女は、韓国の何不自由ない家庭に生まれ、耳も聞こえましたが、2歳で両親が離婚し、運命の転換期を迎えました。韓国の女性が働くことさえ難しかった時代なのに、資格も学歴もない母に引き取られました。貧しいながらも幸せでしたが、長くは続かず、4歳で父親の親戚に預けられることとなります。そんな貧困のなか聴覚を失うこととなるのです。まだ、親が必要な時期である子供であるにも関わらず、何度も親に捨てられ、預けられ、ついには母親が日本人と結婚したことにより、言葉のわからない日本にまで連れてこられることになりました。そこで日本語を覚え、そして自分の意思でイギリスへ留学して、英語を習得します。就職し、生活をエンジョイするのですが、最後に「うつ」になり、回復後、30カ国の旅行にでました。その中でスペイン語ができたらいいなと思い、勉強しました。そして、再就職、婚活、結婚、出産。

耳が聞こえないという障害や親に何度も捨てられるという過酷な運命をたどりながらも、いつも前向きに自分で努力しつづけてきた彼女だから、今の成功をたぐりよせたのだと思います。そして、この本を書くことによって、何度も裏切られたと思っていた母親とも理解し合えたのだと思います。

(かのん)



夫婦脳 —夫心と妻心は、なぜこうも相容れないのか—
黒川伊保子 著 新潮社 2010年 (K・ク)

我が家の場合、夫婦喧嘩は些細なことをきっかけに起こる。例えば、妻から電気の消し忘れを注意されたことであるとか。それを発端に、過去の出来事への非難が次々と出てきて、「なぜ、今、そんな事まで持ち出す？」とカチンと来るのである。



さて、本書「夫婦脳」は、そんな夫婦間の溝について、見事な解説を与えてくれている。著者は、株式会社感性リサーチの代表取締役で脳科学とことばの研究者である。一見難しい科学の本かと思ひ手に取ってみたが、大変読みやすいエッセイ集である。例えば「夫婦は旅先で喧嘩をする、という法則」「男の隠れ家」はなぜ必要か」といったテーマが並び、妻であり母である著者の日常の経験を元に綴られている。

著者によれば、女性脳は男性脳に比べ右脳と左脳の連携がはるかに良い。右脳は感じる領域で左脳は思考の領域であるから、女性脳は感じたことがそのまま言葉に出やすいという特徴があり、直感力が優れていたり、嘘を見抜くのがうまかったりするのだそうである。一方、男性脳は、右脳、左脳を局地的に使う癖があり、事象を簡潔にまとめて表現したりするのが得意なのだそうである。夫婦であれば誰でも一度は経験のありそうなお互いの行き違いや、どうも理解できない相手の行動を、男女の脳の働きの違いから巧みに読み解いていくあたりは、「なるほど」と思われることが多い。

妻にも少し読んでもらい、感想を聞いてみたら、「納得するところもあるけれど、当てはまっていないこともある」とのこと。確かに、この本を読んで、女だからこう、男だからこうと決めつけてしまうことは良くない。いいとこどりする読み方が良いと思う。

冒頭にあげた「過去の出来事への非難が次々と出てくる」のは、著者によれば女性脳には「過去の類似記憶を総動員する才能」があり、無意識のうちに起こることなので止められないのだという。なるほど、そういうふうになれば、夫婦喧嘩も少しは減るかな。 (O.S)



こんなのもあるよ！

きんぎょがにげた	五味 太郎	福音館書店
毒婦。木嶋佳苗100日裁判傍聴記	北原 みのり	朝日新聞出版
尾木ママ 共感・子育てアドバイス	尾木 直樹	中央法規出版
うさぎドロップ	宇仁田 ゆみ	祥伝社
わが家の子育てパパしだい！	小崎 恭弘	旬報社

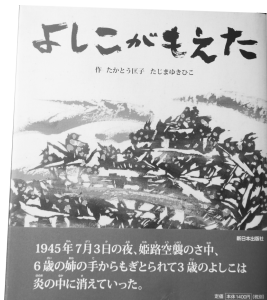
※各書評には“りいぶる”での分類記号を記載しています。例(F・ア)。アルファベットの意味は次のとおりです。カタカナは著者名の頭文字です。

A:フェミニズム B:労働・法律 C:家族・結婚 D:女性・子どもに対する暴力 E:こころ・癒し F:子育て G:からだ
H:セクシャリティ I:女性史 J:自伝・評伝 K:エッセイ・文学 L:高齢社会・福祉 M:男性学 N:資料・雑誌 O:その他

よしがもえた

たかとう匡子 たじま ゆきひこ 作 新日本出版社 2012年 (F・タ)

わたしの三人の子どもたちは大きく成長した。その父親が、この絵本を読んだ。



真夜中に空襲警報が鳴る。戦火を浴びて大勢の人たちとともに防空壕に避難してきた主人公たち。そこで三歳の妹のよしがが死んだ。よしこのそばに駆け寄った父親は絞り出すように声をあげた。「助けてやれなくてごめんよ！父さんがわるかったんや！」今までに聞いたこともない父親の声を幼い姉は聞いた。

わたしは、この絵本を読み進めてきて、今あたかも、このよしこの父親になっていた。戦争という特殊な状況の中で、もし自分の子どもたちが、このような場面に直面したら、わたしはどのような声を出すのだろうか。

話は続いていく。その防空壕がさらに戦火に見舞われ、再び避難が始まる。その時、父親が叫んだ。「こんどこそはぐれたらあかんで！」そう言って、「こんどこそ こんどこそ と父さんは 息たえたよしこをしっかりとむねに抱いて もうひとつの手でわたしの手をつよくにぎりしめ もえる町なかにとび だしていった」のだった。

次の日の朝、家族で妹の弔いをする。

こんな状況は、今、自分たちの周りにはない。だが、新聞やテレビの報道では遠い国で、毎日のように起こっている。世界のあちこちで、たくさんの「よしが」が死んでいるのだ。いや、もしかして、行き来の希薄になった隣近所で、あるいは壁の向こうで「よしが」があちこちで死んでいくのを見逃しているのかもしれない。

作者たかとう匡子さんは、神戸市在住の詩人である。わたしは何度か、たかとうさんとお会いし、話をしたこともある。この本の奥付を見ると、巻頭に「妹のよしこは三歳、私は小学校に入ったばかりの一年生でした。」とある。たかとうさんは 1939 年生まれだから、幼い頃の妹の記憶を、67 年もの長い間もち続け、絵本の構想をあたためてきた。この絵本は、よしこさんの生まれ変わりなのだ。

この絵本の田島さんの絵は、たかとうさんの言葉と交差しながら、戦火の凄まじさと避難する人々の様子や心の中を鮮烈に表している。(武西良和)



この本 よんだ？ 第1号 (2012年12月発行)

◇企画・発行 りいぶるぷらす

◇協力 和歌山県男女共同参画センター“りいぶる”

【編集後記】

・新装開店！一時廃刊となっていた“りいぶる”の書評誌ですが、さよならするのが寂しくて、有志ボランティアにより復活しました。今度はなくならないよう、ぼちぼち続けたいと思っています。

☆ボランティアスタッフ募集!!!

あなたも書評を書いてみませんか？興味のある方は libreplus@yahoo.co.jp までe-mailでご連絡ください。